

月刊

地域保健

2
2012

- 対談 国民皆保険の危機を考える
- 特集 発達障害と虐待の重なりをどう見るか
- フロントランナー 鈴木郁子さん《山形県置賜保健所地域保健予防課 課長》
- ピープル 菊地頌子さん《公衆衛生看護研究所》



鈴木 郁子

さん

● 山形県置賜保健所地域保健予防課課長補佐

人との出会いを大切に

つながりをもつには、まず「顔の見える関係」をつくること。

山形県置賜地区



東京から米沢までは山形新幹線で2時間程度である。福島を過ぎて、吾妻連峰を越えると、車窓からは真っ白な山並が現れ、東北に来たことを実感する。四方を美しい山々に囲まれた米沢の街は、戦国武将、上杉氏ゆかりの地であり、情緒ある城下町の面影を今も残している。

豊町) を所管している。ちなみに置賜の語源は「うきたむ」という、渥原を意味するアイヌの言葉からきていているといわれている。

助産師だった 母の後ろ姿を見て育った

鎌木さんは、米沢市から北へ車で1時間ほどの白鷹町で生まれ育った。保

たお母さんの影響とのこと。お母さんは、地域の人のお産が近いと連絡が入れば、いつ何どきであろうと、どんなに山奥であろうと、バイクやそりを飛ばして駆けつけたそうだ。どういうわけか出産は深夜が多く、鈴木さんはいつも夜中に出掛けていく母の後ろ姿を見送っていたため、寂しい思いもした

「母は、徹夜でお産を終えて疲れて帰つてきても、愚痴一つ言わず、生ま



(現・山形県立保健医療大学) 保健学部を卒業し、山形県職員に採用され、現在の置賜保健所である米沢保健所に勤務した。しかし1年で長井保健所に異動になり、結核対策のために先輩保健師と地域をまわった。今では向かうところ敵なしの鈴木さんも、最初のころはなかなか住民と打ち解けて話すことができず、苦労したという。

回復を助けるための
暖効き

れた赤ちゃんの様子を私に話して聞かせてくれました。こういう仕事を選んだのも、母の仕事に対する真摯な姿勢を間近で見てきたからだと思います。ただし、夜勤のない保健師がよかつた

「米沢は、城下町特有の閉鎖的な氣質があるため、訪問しても最初の3、4

昨年11月、野田首相はわが国のTPP（環太平洋戦略的経済連携協定）への交渉参加を表明した。今後、医療の自由化の名のもと、混合診療導入をきっかけに医療保険制度が崩される懸念を抱く関係者は少なくない。一方、世界に誇るわが国の国民皆保険は格差社会の広がりと並行して無保険者が増大し、保険料収納率も低下。国民皆保険は内外からの危機にさらされ、制度の存続には黄信号がともっている。

今月は国民健康保険の問題に関する著書も多いノンフィクション作家の山岡淳一郎さんと在日外国人の医療に取り組む小林国際クリニック院長の小林米幸さんの対談を企画した。国民皆保険の危機は半世紀以上にわたり保健師が守ってきたものの危機でもある。守るべきものは何か。保健師はこの問題にどう向き合えばよいのか。さまざまな角度から考えてみたい。

国民皆保険の危機を考える

グローバル化と格差社会のなかで



小林米幸さん
（社団法人大和市医師会会長、小林国際クリニック院長）



山岡淳一郎さん
（ノンフィクション作家）

発達障害と虐待の重なりをどう見るか

発達障害児（特に高機能自閉症など）は虐待を受けやすいといわれる。背景には発達障害児の行動特性が親をいらだたせ虐待を引き起こしやすいことなどがある。一方、被虐待児の一部は発達障害と似た様相を呈するともいわれ、児童虐待と発達障害は互に影響しながら進んでいくケースは少なくないと思われる。特集では、両者の相関を早くから指摘してきた杉山登志郎さんのインタビューをはじめ、相関の視点を踏まえた地域の取り組み事例などを紹介する。

P42 発達障害と虐待はトラウマ（心的外傷）でつながっている

◎インタビュー
浜松医科大学児童青年期精神医学講座特任教授 杉山登志郎さん
聞き手 編集部

P46 子ども虐待と発達障害のかかわり

あいち小児保健医療総合センターの取り組み
◎文 編集部

P52 保護者と保育者への発達アンケートを実施して

半田市の取り組み
◎半田市子育て支援部 間瀬小夜子

P59 連絡用シートで保健所との情報共有を強化

渋谷区子ども家庭支援センターの取り組み
◎文 編集部



いきなり原爆被爆者 対策の仕事に

66年たっても残る心の傷に向き合って

たやまともみ
田山友美さん

●長崎市原爆被爆対策部援護課

◀原爆の実相を訴える
平和公園。後ろに見えるのは平和記念像



◎文・写真
西内義雄
(医療・保健ジャーナリスト)

ピリピリした現場

言葉の通り、長崎大学医学部保健学科に進んだ田山さんであった。

対策部の文字が見える。その援護課という部署にいるのが、今回のひよこ、田山友美さんだ。

地元長崎市出身の26歳。妹さんも現在看護師をしているという。

「両親は医療と関係ない仕事をしているのに姉妹そろつて同じような道に進んだのは、なぜなのでしょうね（笑）。あえて思い当たるものあげるなら、母が昔、看護師になりたかったらしいですが……」

ハッキリした理由はないけれど、高校時代に医療職を目指そうと思った。最終的に看護師か臨床検査技師まで絞り、悩んだ末、センター一次試験ギリギリになつて看護師を選んだ。

「臨床検査技師に傾きかけていました。でも、長崎にこの資格を取れる大

学がなくて……。私は長崎から出たくなかったですし、親からも進学するなら公立といわれていて、そうなると、もう、看護で長崎大学なんですね（笑）」

看護の勉強そのものは好きだった。高校でも生物が好きだったので、座学はすんなり受け入れることができた。

最初の1年間は看護の勉強は楽しいとの印象を持つことができた。当然、2

昨年3月の東日本大震災をきっかけに、日本中が放射線の怖さを改めて感じたはずだ。体への影響はどうなのか、いつたいどうしたらこの不安をぬぐえるのか、世界で唯一の被爆国なのに、いざとなつたらあまりに知識がないことも再認識させられた。

日本に原爆が投下されてすでに66年の月日が流れている。果たして今の被爆地はどのような保健活動をしているのか。ふと疑問を持ち調べてみると、

長崎市には被爆者に応対する部署があり、保健師が配属されていた。そしてひよこさんがひとりいることも分かった。これは行くしかあるまい！ 早速長崎に飛んだ。

長崎にいたいから 看護を目指した

市役所の廊下には色分けされた矢印が描かれている。案内に従い奥に進むと、他の自治体では見慣れぬ原爆被爆